

菊岡沾涼の俳諧活動

真 島 望

一、はじめに

『江戸砂子』（享保十七年刊）・『本朝世事談綺』（享保十九年刊）・『諸国里人談』（寛保三年刊）という、読本作家・草双紙作家をはじめとする他の文芸家に大きな影響を与えた地誌や説話集、そして類書等の編者として世に知られる菊岡沾涼は、享保期に活躍した雑学家ともいべき人物であるが、その伝記研究は現在に至るまで寥々たるもので、郷土史研究の方面から光を当てられることは希にあったものの、それとて文事全体にわたるものではなかった。

ましてその俳諧活動に焦点を絞った研究ともなると皆無といつてよい。彼の所属した江戸座俳諧自体の研究が近年に至

るまで立ち遅れていた故に、当時の俳壇の中で傍流であったとおぼしき沾涼が、俳諧史研究上見過ごされてきたことはむしろ当然のことと言えるだろう。そしてまた、『江戸砂子』をはじめとする地誌・類書作家としての活躍と名声が、彼の俳諧活動を蔽ってしまったとも言えるのである。

しかし、沾涼はあくまで芳賀一晶・内藤露沾という当代の実力者に教えを受け門戸を張った俳諧宗匠である。剩え『百福寿』（享保二年刊）・『綾錦』（享保十七年刊）・『藻塩袋』（寛保三年刊）などの絵俳書・俳論書をものしたほどの人物の俳諧に関する事績の整理・検証は、伝記研究の一貫として雑学家としての姿を見る前に押さえておかねばならない事であるの言うまでも無いが、享保期の江戸座俳諧全体の動向を考える上でも決して無益なことではないと思う。

小論は、沾涼の俳諧活動に関する事績を考証年譜形式にまとめ、それに若干の考察を試みんとするものである。

二、俳諧活動を中心とした事績（年譜）

（凡例）

- 一、沾涼に直接関わる項目は○を見出しとし、それ以外の項目については▲を見出しとした。更に二字下げで考証を記した。
- 一、連句については沾涼句とその前句をかかげることを原則とした。
- 一、引用するにあたって漢字の字体は適宜現行のものに改めた。ただし、翻刻物や論文の引用の際は、原則として底本の書式に従った。

延宝八年（一六八〇） 庚申 一歳

○七月、伊賀国拜野郡上野城下本町通り札ノ辻の酒造業、飯束瀬左衛門政安の四男として生まれる（飯束氏過去帳）・「菊岡氏文書」・「筠庭雜録」³。通称勘左衛門。後に

嗣子の不在を理由に母方の実家菊岡家に養子に出され（年月日不明）、名を房行とする（「菊岡氏文書」）。

元禄十二年（一六九九）以降 二十歳

○養父菊岡行尚に実子誕生のため自ら望んで出府し（この時通称を藤右衛門と改む）、神田鍛冶町に住す（「菊岡氏文書」・「筠庭雜録」）。また、この頃芳賀一品に師事するか。俳名は南仙と号す（『誹家大系図』²）。

一品は宝永四年に没するが、その晩年俳壇との交渉がほとんど無いことから、沾涼が彼に学んだのは元禄年中と考えられる。

○内藤露沾の門に入るか。俳名はこの頃から南仙の他に、崔下菴・南仙斎などがある（『誹家大系図』・『誹家奇人談』⁶）。

享保二年（一七一七） 丁酉 三十八歳

○初冬、絵俳書『百福寿』を編集・刊行。江戸万屋清兵衛板、半紙本上下二卷二冊、彫工吉田宇白、沾徳・立志

(三世)序、全角・沾洲・介我跋。

江戸座における絵俳書流行の先陣を切った作品で、挿絵はその大半を立志門全角が描いているが、沾涼自身も三点で筆をとっている(画号は南仙)。巻頭作者は露沾で、ほか沾徳・介我・沾洲・立志・祇空・全角などの句が収められる。自身の句は発句一句、歌仙に二句見られるので以下に掲げる。

百草に交り得たりからす麦

民竈南仙

*

山荘の滴くをむすふ清水かな

正与

茶の煮こほる、昼かほの花

南仙

(中略)

五節句と、くかほちや安南

立志

御供も七八人のいと春日

南仙^⑦

(以下略)

(いずれも下巻)

○十二月、立志(三世)一門の一枚摺(刻師・書肆等不^明)に発句一句入集。

全角(前項参照)による絵入りの一枚摺で、「享保二年西臘月」とあるが、歳旦とすると刊行は翌年正月か。他に立志をはじめとして、尾谷・岷江・素

葉・全角・晴星(後の水国)などの句を載す。

沾涼句は「きはち」を題として――

年のうちに春は木鉢を買まじよか

南仙^⑧

これは自著以外に見える句の、確認しうる限り最初の例であり、「南仙」の名で入集する唯一の句でもある。

立圃門系の三世立志(別号和散才・立詠)と沾涼は比較的近い関係にあったと考えられる(享保十八年の項参照)。既述の如く『百福寿』にも序を寄せており、これ以後もしばしば二人の交流を目にする。

享保四年(一七一九)己亥 四十歳

○九月刊行の文露編『花林燭』(半紙本一冊、吉田宇白板、湖十序、石遊・有隣跋)に歌仙一句、発句一句入集。

享保二年九月三日に世を去った(序文による)梅盛門の俳人、秋風の三回忌追善集。編者中川文露については、秋風の娘婿であるという事以外詳らかでない。

二つの歌仙・諸氏の追悼吟・秋風の遺吟などで構成されるが、故人の出身地たる京の俳人や、秋田の俳諧師などが顔を見せるほかは、入集者は露沾・素丸・沾洲・立志・青峨・貞佐・湖十・琴風といった江戸座系の人々がその大半を占める。

沾涼は巻頭の露沾発句の歌仙に一座し、またそれとは別に追悼吟を送るなど、晩年江戸にあった秋風とは浅からぬ交流があったかと思わせる（或は関係があったのはむしろ編者文露とか。彼は沾涼編『百福寿』に入集している）。

歌仙には初折裏十句目に、

済て来て箒取^ル身の思ひしれ

未鳳

石て吹せぬ禿倉也けり

沾涼

とあり、追善発句については以下の通り。

鳴滝は景を以世に鳴^ル

風翁は俳を以世に鳴^ル

琴を割^ル例あり硯秋の水

南仙著 沾涼[◎]

享保五年（一七二〇） 庚子 四十一歳

○一月、立志一門の歳旦興行に連座。同歳旦帖（半紙本一冊、吉田宇白板）に発句二句入集。

享保二年の項でも述べた如く、沾涼と懇意にしていたとおぼしき和散才立志との交流の様を伝える資料の一つ。

立志門人以外の入集の作者は露沾・如蒿・沾徳・沾洲・湖十・青峨・貞佐・識月等、江戸座の有力俳諧師連中。

沾涼句は「抜頭」を題として――

さ、れ石の舞台霞やゆふかつら

沾涼

また、「守歳」の項に、

うるほひは年の尾鱗の巨魚にあり

沾涼[◎]

とある二句。

○八月、絵俳書『続福寿』を編集・刊行。江戸万屋清兵衛板、半紙本上下二巻二冊、彫工吉田宇白、露沾序、湖十（初代）・自跋。また、この頃俳名を沾涼と改める。

『百福寿』の好評を受けて編まれた続編で、十四点の挿絵で沾涼が筆をとる。文露・青峨・如蒿らが入集。なお、沾涼自作は発句一句、歌仙五句。発句は以下の通り。

涼しさは足駄を越さぬなかれ哉 南仙斎沾涼
 大尾の歌仙は「表徳を改めさせ玉ふ段の御句」の
 詞書があり、その発句は露沾。

此一字広く榮へよ百千鳥

露沾

植替てより菊のさし杭

沾涼

(中略)

諸願整華の盛砂

露人

笑ふおりなみよく見ゆる日本の園

沾涼

(中略)

木に竹を継ぐ中のさゝら男

立志

詰書は池田伊丹の九月更々

沾涼

(中略)

給仕に頼む布衣の雇人

露人

十分にうるほふ空や夏筑波

沾涼

(中略)

せめてもの貝なき巢にも竹はしこ

晴星

立居も黒人物語り咲

沾涼

(以下略)

(いづれも下巻)

また、露沾による序に、「百福寿は百情の姿を象
 はし功成とけて見む人の目を悦しむ。つ、いて前に

洩れたる好子の秀逸幽玄の句々を画て後集となす。
 撰者則南仙今あらためて沾涼と呼ぶ」とあり、この
 歌仙が沾涼の俳名改号に際して巻かれたものである
 ことがわかる。

これ以降江戸では絵俳書の流行に火が着き、年に
 数冊刊行されるようになる(そのほとんどは露月の
 手になるもの)。

○同八月、如蒿編『一日千句』(横本一卷一冊、無刊記、

露沾序、自跋)に発句一句入集。

松宇文庫本は無刊記で、跋文に「享保五年庚子秋
 八月朔豊屋主人如蒿探筆於榮志軒」とあること
 から、興行自体は本年であると思われるのでここに
 項目を立てた。ただし、『俳文学大辞典』によれば
 刊記が備わる綿屋文庫本には享保十五年刊と記され
 ており、これは後刷りであるにせよ、本書の初版刊
 行年時は不明。

沾涼句は「黄蘭」を題として――

しら菊に鐘の筋引夜明哉

沾涼¹³

享保六年(一七二一) 辛丑 四十二歳

○二月、立志一門の歳旦帖（大本一冊、吉田宇白板）に発句二句入集。

南仙齋 沾涼 下巻

享保二年・同五年に続いて実に三度目の立志歳旦への入集である。他に露沾・蘭台・如蒿・壹月・識月・湖十・吉田宇白などの句が見える。

沾涼句は「北籬」の項に、

梅召すや蛇さたをか海領地
とあるものと、「星回」を題として――

花よりも月よりも面白き物師走哉
沾涼

享保七年（一七二二） 壬寅 四十三歳

○六月、識月編『俳度曲』（豊島治左衛門・吉田宇右衛門板、半紙本上下二巻二冊、沾徳序、沾洲跋）に発句一句入集。

親世流の謡曲師であり、沾徳・沾洲に教えを請うた俳諧師でもある識月が編んだ絵俳書で、二百十番の謡曲名を題とする諸俳人の画賛句を集めた物。本書には沾洲・沾山（初代）・湖十らの句と共に沾涼の「龍虎」を題目とした、

甲越の山をひつはる辛夷かな

という句が見える。

撰者識月は後露沾門人となり、享保九年五十八歳の時露沾より「露」の字を与えられ、露月と改めている。すなわち、沾涼とは同門であり、沾涼の「綾錦」中巻に

露月へ誹の一字を送

世の誉れ露す光りかつら人
露沾

と改号の際に露沾の送った発句が見える。

○十二月、松井立詠（三世立志）編『絵文匣』（半紙本上下二巻二冊、松井庄左衛門板、吉田宇右衛門刻、露沾序、自跋）に発句一句入集。

和漢古今の著名な人物の画を題として、諸俳人の句を集めたもの。如蒿・巴山・識月・長水・秋色・貞佐・沾徳などの江戸座俳人が多く入集する。

編者立詠は、前述の和散才立志の初号。ここにも沾涼との関係がみとめられる。

沾涼句は長頭丸（松永貞徳）を題として――
世の花のふ、きにさすやおからかさ
南仙齋 沾涼

享保八年（一七二三） 癸卯 四十四歳

（下巻）

○本年夏跋の貞佐編『そのはしら』（半紙本上下二巻二冊、

大久保一富刻、自序、豊屋主人（如蒿）跋）に発句一句

入集。

其角門で江戸座の有力俳諧師である貞佐が編んだ、

晋子其角の十七回忌追善集。追悼の歌仙や諸家の追

善吟を上巻に収め、下巻には其角編『萩の露』（元

禄六年刊）の復刻などを収む。

沾涼は歌仙等には一座せず、追悼吟を一句寄せる

にとどまっている。「室井を汲て風雅に渡中に桑々

畔のぬしに逢て是」との詞書のある一群に――

なつかしき梅と墨とやむかしの香

沾涼¹⁸

（上巻）

○十一月下旬、絵俳書『百華実』を編集・刊行。江戸万屋

清兵衛板、半紙本上下二巻二冊、彫工吉田宇白、自序、

閑露人跋。

露沾・文露・立志・識月・如蒿らが入集。沾涼は

十二点の絵を描いている。その体裁・内容は『百福
寿』・『続福寿』の延長線上にあるもの。当時、露月
らも絵俳書を盛んにものしており、絵俳書の流行ぶ
りが窺われる。

自作句は一句。

華にも見実とも影浮ことし竹

沾涼¹⁹

（下巻）

『百福寿』・『続福寿』と享保二年から続けざまに
編じてきた、言わば絵俳書シリーズとも言うべき一
連の作品の最後を飾るものであるが、これまで見た
ようにすべて書肆は江戸万屋清兵衛からの発刊とな
っている。

万屋清兵衛といえは西鶴本や八文字屋本の江戸販
売を行ってきた大店であるが、周知の如く俳書の刊
行も数多い。江戸座系に限って例を挙げれば、其角
編『類柑子』（享保四年刊）・貞佐編『代々蚕』（享
保十一年刊）・青娥編『続江戸筏』（享保十五年刊）
などがある²⁰。

また、沾涼もこれら絵俳書三作に限らず、『日光
道中行程記』（享保十二年刊、「割印帳」による）や

後述する『江戸砂子』（享保十七年刊）、『本朝世事談綺』（享保十九年刊）を同書肆より刊行するなど、後年に至るまで関係を続けている。

万屋清兵衛自身、桑楊なる俳号を持ち、露月ほか編『名物鹿子』（享保十八年刊）などの俳書に度々顔を見せる俳人であったことは、既に塩崎俊彦氏が指摘されているが、氏の述べられるように其角門の重鎮貞佐を師としてもち、その没後七回忌に及んでは同門の平砂が追善文を寄せるなど、本業の片手間ではあるうが、俳人としてそれなりに熱心に活動していたとなれば、沾涼とも何らかの交流があったと考えても然程見当違いではなからう。

刻師もこれまた書肆と同様、三冊共すべて同一の吉田宇白なる人物である。沾徳撰『後余花千二百句』（享保六年刊）・識月編『ふたもとの花』（享保九年刊）・沾洲編『百千万』（享保十年刊）などの江戸座主流派の俳書を多く手掛けており、前述の江戸の名所・名物を詠んだ句を集めた『名物鹿子』にはその名が題として立てられるなど、当時かなり著名な人物であったらしい。

この人物もやはり俳諧を嗜んだようで、立志（三世）や沾洲の歳旦に顔を見せていることが知られる。沾涼は立志と交流のあった形跡があるので、そのあたりを通じて沾涼と宇白の間にも親交があった可能性は否定できない。

享保十一年（一七二六） 丙午 四十七歳

○貞山編『ひらつ、み』（半紙本一冊、彫工大久保一富、沾洲序、自跋）に発句一句入集。

この年剃髪して上野国藤岡を出て江戸に赴き、宗匠として立った貞山の記念集。貞山は貞徳の末裔たる松永尺山門人。地方から出府して江戸座の中で活動したという共通点はあるが、具体的に沾涼とどのような関係だったかは不明。

沾涼は次の発句を寄せる。

早速の徳のひとつは髪いきれ

沾涼

▲五月三十日、水間沾徳没す。享年六十五歳。

享保十二年（一七二七） 丁未 四十八歳

○三月十七日、湯島天満宮において万句興行〔綾錦〕中巻。

連衆は、魚路・五百武・湖十・佳風・潭北・露牛・吏登・一漁・丈蓑・桃翁・当国・沾山・白雲・百里・両橋・節士・東巴・露月・丈岳・末石・八十・巾車・東閣・仙杏・呉竹・涼之・倫仙・紅夕・雪朝・貫十・曙漸・出紫・孤舟・林潭・仙魚・沾友・桃沾。

『俳文学大辞典』「立机」の項(田中善信氏執筆)によれば、享保頃から立机の際に万句を興行する慣例が出来たという。明記はされていないものの、『綾錦』に見えるこの万句興行もまた沾涼の立机を意味するものであり、この時から宗匠として立ったと考えてよいのではないだろうか。

なお、連衆の顔ぶれは前に記した通りであるが、「歳へだ、りたんざくも見えず、隅より見出しぬる十が一記す」と注記されるように、賀句を記した短冊(懐紙のことか)が散逸したため、上述の面々はあくまで連衆の一部であり、全容を知ることではない。

○仲冬序の太田狸々編『伊賀産湯』(半紙本地二巻二冊、自序、信安跋)に発句四句入集。また、追善文を送る。

編者太田狸々は伊賀国上野在住の其角門の俳人で、沾涼と交流があった。沾涼の家書ともいふべき『綾錦』・『鳥山彦』にその句が見える。また、後述する沾涼の伊賀帰郷の際に編んだ紀行文、『故郷の水』(享保十八年成)でも、沾涼は同郷の狸々と懇意にしていたことが知れる。

本書は沾涼・狸々と同じ伊賀上野出身である芭蕉の三十三回忌追善集で、江戸・大坂・近江・大和・伊賀など各国の俳諧師の発句・連句を収めている。沾涼による追善文と発句は以下の通り。

故翁は伊賀の産にして予と国を同うす。誠や祖父菊岡如幻は翁を北村法印へ渡せる橋の縁ありぬ。ことしの冬、伊賀の宗匠狸々翁追福のいなみある由同姓つたふるにより善を追ふのみ。(傍点筆者)。

甲戌の小春の花をことしの香

沾涼

(以上天巻)

夢吹や蝉にゆらる、ひとつ家

江戸 沾涼

唐の吉野、川歎星の川

正言沾涼

杉の花椀の花也けふの月

問沾涼

(以上地巻)

追善文に自らの養祖父と芭蕉との關係を述べているのは注目すべきことで、この親蕉門的発言は、以後の彼の著書に度々見ることができるとして、後述するように、このような芭蕉や蕉風に近接するかの如き姿勢が沾涼の江戸俳壇における孤立の原因の一つではないかと考えられるのである。

享保十五年（一七三〇） 庚戌 五十一歳

○二月、二世市川团十郎編『父の恩』（大本上下二巻一冊、大久保一富刻、旧徳・一世青嶋序、沾洲跋）に発句一句入集。

歌舞伎役者初代市川团十郎の二十七回忌に際して編まれた追善集で、七十余名の役者の点鬼簿や知友から送られた追善句などを収める。役者の没年月日

や俗名・墓所が明確に記され、团十郎と江戸座俳人の交流の様を窺える意味でも資料的価値が高い。また、色刷絵俳書の先駆けとしても興味深い作品。編者二世团十郎は役者である傍ら俳諧・狂歌をよくした人。俳諧は其角門系で、俳名は栢筵・三升などと号した。

沾涼句は下巻「作善」の項に見える。

当東門此中日のさくらかな

沾涼

沾涼も二世团十郎と交流があったと考えてよいだろうか。

享保十六年（一七三一） 辛亥 五十二歳

▲九月、長水ら編『五色墨』（戸倉屋喜兵衛板、半紙本一冊）刊行さる。

江戸座の素人俳諧師たちが、当代流行の付句点取俳諧の行き過ぎに対する反省を打ち出したもので、沾涼はこれをもって譬喩俳諧が終焉したと考えた（『鳥山彦』）。これについては後述する。

○五月、地誌『江戸砂子』を刊行。万屋清兵衛板、半紙本
六卷六冊、自序、自跋。

江戸の寺社仏閣・名所・旧跡などの由来を考証した地誌。その完成に八年を費やしたというまさに大著である。この書にも数点の発句を載せる。すなわち、神田社に奉納の発句――

奉納 朝袖は香のしみわたるむら若葉 沾涼

王子神社にての発句――

五香よぶ木魂のうへをほと、きす 菊岡沾涼

(以上卷之三)

浄土宗亀鶴山誓閑寺のしらぬざくらを訪れての発句――

知らぬとはさくらにしるき教へあり

崔下菴沾涼

(卷之四)

以上の三句である。

なお、俳諧に関する事績のみを取り上げるといふ性格上、今回は割愛したが、沾涼は享保二十年に続

編として『続江戸砂子』(松葉軒万屋清兵衛板、半紙本五刊五冊、自序、門人ら跋)を上梓している。

沾涼の没後にも丹治庶智・牧冬渉斎の両名による改訂版『再江戸砂子』(江戸藤木久市板、半紙本六卷八冊、丹治政逸序、田惟章跋)をはじめとする増補版が度々刊行されるなど、その江戸地誌としての資料的価値と評価は高く、以後の多くの地誌作家たちに多大な影響を与えた。

○六月、俳諧系譜・俳論書『綾錦』を刊行。江戸西村源

六・京都西村一郎右衛門合板、半紙本上中下三卷三冊、自序、宅跋。

本書には刊記を異にする後印本が散見する。管見によれば西村源六単独本(元文四年印)・須原屋茂兵衛単独本・花屋久治郎単独本・前川六左衛門単独本(いずれも発行年記無し)・無刊記本など様々で、その人気の高さが窺われる。また、別に刊記が、

享保十二丁 未歳仲夏吉日

京都書肆 西村市良右衛門

江戸書林 西村 源六蔵板

江戸墨橋町 彫工 栗原次郎兵衛

となつてゐる物も存在する。⁽³²⁾ ただし、これの巻末に付されている蔵版目録には「鳥山彦」(享保二十一年刊)が見える。これは、沾洲編「親うぐひす」(享保二十年刊)に反駁した書であるから、この本自体は少なくとも享保二十年以降の後印本であることがわかる。他にも乱丁のある物もあり、本文の異同も疑われるが、諸本研究は別の機会に譲りたいと思ふ。

沾涼がその序に「慶長中、花咲の翁誹林一同の宗匠の免許を蒙て以来海内靡然として、之を誹林の権輿と為す。是に自りて以来其源洪々として、其流蕩々たり。此道に達して以て宗匠と為る者は、潮の涌が如く流の漫が如し」、「猶、東都に下り点者夥しく有れば、其滄區々として分明ならず。是に因て遼は古書を以て力と為し、中ころは老誹の前に蹲踞其髻上の塵を払ひ、近きは其知覺所に任て各々我か持量を逞」と述べるように、本書は松永貞徳以降に俳壇に登場・乱立した宗匠たち(主として江戸座)の系譜や点式の整理・解明を

主眼として執筆され、江戸の宗匠たちの句メの模刻や点印譜、各国俳諧師の俳諧系図をのせ、また自身の門を中心とする多くの発句・歌仙・三十六番句合などを収める。

一見すると当時の江戸座俳壇を俯瞰し、客観的かつ体系的にその動向を捉えているように思われるけれども、その実、当時の主流である沾洲の句を一つしか収めず、本来沾洲門とされるべき魚尺・羊素の名は系図に見えない。また、水国は立志門として出されるなど、沾洲一門に関しては公正な執筆態度とは言い難い面があるのである。この背景には沾涼が当時の俳壇で悉く軽視されていたという事情があり、沾涼は本書でその状況に一石を投じようとしたと見ることが出来る。この事は次章にて詳述する。

享保十八年(一七三三) 癸丑 五十四歳

○三月五日、京に「所用」ありて江戸を發つ(「故郷の水」)。

「所用」の内容は不明。ただ、急ぎの旅であった

らしく、暇乞いもままならず餞別吟なども無かったが、それでも門人などごく近しい俳人より句を寄せられている。以下に引用しておく。

東都をたつハけふといひ、あすの事也。大かたはいとまこひたにせされはしらぬ人多くて、餞別なし。されとも常にしたしき方より給ふ。句少々あり

魁もみやこの花や江戸砂子

丈岳

花の旅誰を射る気やはつ御室

魚路

蝶よせる驕にほふや日和山

雪朝

よい時分よい上り梁かつら川

五百武

ふるさとの花にや袖のあや錦

倫仙

気霽つ、霞の不二を筆勝手

千楓

此日和鳥も仕合花分限

千洗

ついて行心の旅や花に蝶

梅五

無事と云外ことはなし花門出

布仙

沾涼も出発に際し、

江戸の花今年は見ずに別れけり

の句あり。

○同十四日、故郷伊賀上野に到着する（「故郷の水」）。

京に向かう途中、沾涼は故郷伊賀に立ち寄り、東海道を上り、藤沢・蒲原・嶋田・桑名・津を経て十四日夕刻に伊賀に入り、吉村何某・服部涼・義淵法師兄弟などの出迎えをうける。その日は生家飯束家に泊まり、一族との二十四年ぶりの対面を果たしている。「故郷の水」に、

予故郷の道を経事二十四年、今旧里に帰れば、
はじめて面をあす甥あり、姪有、その子あり、

誠に血の筋をしたひむつひよるのよろこびを述。

斧の柯の故事に並ぶや百千鳥

とあり、その感激の様子が窺われる。

○同十六日、実父三悦の忌日（享保八年七月十六日没）につき、菩提寺である法林寺に詣でる。「高き事須弥より上の花の雲」の発句あり（「故郷の水」）。

○同十七日、所用のため再び京に向かう（「故郷の水」）。

沾涼は伊賀で、親族との対面・亡き父母（実母行宜女は元禄十二年没）の墓参りと、同月七日にこの世を去ったばかりの義弟菊岡有隣（行尚の二男）の弔いなどを済ませて、今回の旅の目的地である京の林家に向かったが、その用向きが何であったかは明

記されていない。「故郷の水」に、

洛陽林家にとまる事十余日、然共用の事しけく

いとまあらねば、京師の誹士に逢ず

とあり、京では雑用に追われていたようで、知友に会うこともままならなかったようであり、どのような俳人と交流があったのかを知ることができないが、それでも、

石井暮四は寺町五条にあれば、京人の時訪ひし

かとも他行也。巴人は江戸よりの因ミ必たづぬ

べし、と宮西勾当に問へば室町出水なるよし、

立売よりはやうく五三丁の所なればけふよ、

あすよ、とくれてこれさへとひよらず。

とあるによつて、鞭石門人の暮四や、其角門の俳人で江戸座の沾徳なども交流のあった巴人などと親しくしていたことがわかる。これら京住まいの俳諧師の俳書に、沾涼の入集するものがあるか調査が必要であろう。追つて報告したい。

その後、すべての用事を片付けて、四月三日京を発つこととなる。

○四月五日、再び伊賀を訪れる（『故郷の水』）。

京を出た後、宇治・奈良を廻つて名張・古山を通

り、伊賀上野に入った。菊岡紀之（行尚の実の長男。

『綾錦』では「記之」と表記）・太田狸々などの出迎

えをうける。これより十数日間、沾涼は当地の友人・知人と交遊した。

この時にもいくつか句をものしている。すなわち、

三月七日に世を去つた義弟菊岡有隣に、

四五日で逢ぬ涙を夏の露

の句を捧げ、また、涼佐筆の蓑虫庵図に讀じて、

日本へ句ひ配るや花樽

の句がある如くである。

○同十九日、江戸へ帰るため伊賀を発つ（『故郷の水』）。

『故郷の水』には郷里の親戚や友人との別れの様子、餞別吟と共に記されている。

栗掛へむらかる袖やきやうくし 紀之

麦の穂も駕になひくや薫る風 涼佐

沾涼子の東武へ帰り給ふを送る。

帰るさの袖や江尻の初茄子 狸々

○同二十九日、江戸日本橋に帰着する（『故郷の水』）。

○五月、自筆稿本『故郷の水』成る。半紙本一冊。上京の

際の道中記。

その成立時期は卷末の識語に、

享保十八のとし五月雨のころ菊岡沾涼みつから

書之

とあることから明瞭で、また、書名は江戸帰着後の
自作句、

故郷の水は乳の味さらふ酒

沾涼

による。

本書は、京に向かう途中郷里である伊賀に立ち寄
った際の様子を記していることもあり、彼の交友・
親戚関係を知ることができる好資料である。先に述
べた京の俳諧師との交流の様子などは、その一例に
過ぎない。

また、自身の俳書『綾錦』や『鳥山彦』などに含
まれない発句が多数収められ、他の江戸座系の俳書
に入集することが稀である故に、その点でも大変貴
重な資料である。紙幅に限りがあるため、すべてを
載せる事はできなかったが、その数は七十句余りで
ある。

▲九月十四日、内藤露沾没す。享年七十九歳。

○この年以降成立の写本『露沾俳諧集』（大本欠十冊（「春
之一」「五」・「夏之二」・「秋之一」・二・四」・「冬之三終」）、
奥書・識語欠）に発句三句入集。

奥州磐城平藩の内藤下野守義英と彼の門人、親交
のあつた人物の俳諧・和歌・雑俳などの作品を集成
したもの。退身した天和二年から没したこの年頃ま
での作品を四季別に収める。各句作の詠まれた時期
は特に記されていない。

露沾の門人たる沾徳やその系統の沾洲・沾山・水
国・成屋などをはじめとして、露沾が深く関つた貞
佐・祇空・潭北・長水ら江戸座の人々が多く顔を見
せる。露沾門正統の沾涼の句も当然見えるが、その
数は他門である潭北などと比しても決して多いとは
言えない。もともと本書には欠本があり（冊数未
詳）、入集者の全貌を完全に伝えるものでないのは
注意すべき事である。

以下に沾涼の句を示す。

出来合てあり宮島居江戸の春

沾涼

（春之一）

君に徳神代を匂ふ花つはき

沾涼

此音も興津に届けよ大晦日

(春之五)
沾涼あつりやう
(冬之三)

享保二十一年(一七三六) 丙辰 五十七歳

享保二十年(一七三五) 乙卯 五十六歳

▲三月、沾洲編『親うぐひす』刊行さる。須原屋茂兵衛板、半紙本一冊、自序、一乾跋。

本書は沾洲とその門下たる成屋・水国・乾什・百洲・壺月・常仙・尾谷の八吟八歌仙に、沾洲剃髮にもなつて羊素を加えて巻かれた追加歌仙一卷、ならびに四季各一句の発句を収めたもの。沾洲は自序に、

亦近年猥りに宗匠の系図を定め板行せしめ、己か世渡にして其血脉を違へ他国を犯し胡論の書あり。悲しき業なり。是ををのくいかりて此歌仙の端に許々多久の罪を述へきといへとも、小人にか、はるへからすと止めとめと述べ、暗に沾涼の「綾錦」を批難した。

○五月、俳論書『鳥山彦』を刊行。江戸西村源六郎板、半紙本甲乙二卷二冊、彫工大久保富一(橋本町一丁目)、自序、自跋。

甲巻は副題に「綾錦後編」とあるように、享保十七年刊の『綾錦』の補遺・訂正を旨として、去嫌をまとめた「誹諧信折歌百首」や俳風の変化について概観した「誹風変化の弁」などを収める。

また、沾涼門下を中心とした発句・連句が多く見え、その活動の一端を窺うことができる。

いにし卯のとし総の下州に至り、かしまに詣る事あり。海なき国は扶桑みまうに多しといへども、山なきはあらず。この国はみなひら山にして、峯ある山はなし。

雲の作る峯ばかり也下つふさ 沾涼

かしまにて 紀行の句は省之しんせいやす。

ぬけじとや葛も繋つなぎて神の石

息栖いさすの浜の女瓶めがめ・男瓶おがめは海中にあり。その中なるうしほ、ひがたにはさみづとなりてのこ

るよし。これなん、忍塩井の水と云。

初汐やもどれる水の神ごゝろ

香取のやしろ

置露も神代の杉の匂ひ哉

のように、鹿島詣での様子なども筆録されている。

〔紀行の句は省之。〕とあるからには、「故郷の水」

の如き紀行文が独立して存在する可能性もある。

他にも自らの門人を交えての句会興行の際の句も見える。

一転して乙巻は「親鸞序文返破」と題し、前年刊行の沾洲編『親うぐひす』に反駁した論難の書となっている。冒頭では「親うぐひす」の序文を一節く引用し、これを悉く論破するという形をとっているが、その一字一句に固執する様は、揚げ足取りの感も無しとしない。

にも関わらず、俳壇でのこれ以上の孤立を避けるためであろうか〔跋文は〕序にくらぶれば、みやま木のかたはらに花の盛なるがごとし、〔入集の句は〕これを序文に比すれば、あたかも糞掃堆頭に無価宝あるがごとしと述べ、自跋においても、

「一集さらに敵にあらず。たゞ序文をもて敵とす。

是、吾為にあらず。人の為所也。東都の宗匠

は各年来の旧友にて、今一面をあはする時は互に

その睦びあり。何そ人の美を掩む」とことわるな

ど、その攻撃対象を沾洲と彼の譬諭俳諧に限定して

いる。

寛保元年（一七四一）辛酉 六十二歳

▲十二月十五日、貴志沾洲没す。享年七十二歳。

生川春明著「誹家大系図」（天保九年刊）に見える「元文四年、行年七十歳」とあるのが定説化していたが、白石悌三氏が尾谷編「園圃録」（寛保元年十二月刊）の記事を示し、これを訂正された。

沾洲の没後、その跡目は沾山が継ぐこととなる。

寛保三年（一七四三）癸亥 六十四歳

○正月、俳諧注釈書『藻塩袋』を刊行。江戸若菜屋小兵衛板、半紙本五卷五冊、自序、吏登跋。

本書には、後印本として大坂吉文字屋市兵衛・江戸吉文字屋次郎兵衛合刻本（宝曆四年印）、河内屋嘉七（文政五年印）による改題本（『俳諧故事談』）が存在する。

芭蕉・其角・嵐雪・一品などの先人たち、露沾・沾徳・立志・吏登・露月・貞佐などの比較的近年の俳諧師、そして自らの門下の作品など、様々な発句を集めそれに和漢の文献を引用して注釈をつけたもの。

自身の句にも、

野も空ラに空も野にありけふの月

米山

初雪ややうく土の消るほと

米山

（以上巻之二）

影落て松もうへ行ラ早苗かな

米山

鶏はやしまた寝ぬ夏の月の聲

米山

川面ラの杭に濡鶴の遠さかな

米山

（以上巻之三）

花雪の外を胡蝶の雪吹かな

米山

（巻之三）

箒取ル庭にほとよき時雨かな

米山

待ッ人を寝せて来る聲ほと、きす

米山

月にたらぬ宿の女や軽井沢

沾涼

（以上巻之五）

以上、九句に注を施している。自注として貴重なものであるので参考までに先頭の発句（野も空に〜）に付されている注を挙げておく。

むさし野にて

野も空ラに空も野にありけふの月

米山

○茫ラ渺ラ武ト野天与均ト

元政

○新古今集 行すゑは空もひとつにむさしの、

○草のはらよりいつる月かけ 撰政太政大臣

○袋草紙云俊網朝臣の家に水上月の歌を詠して

これを構す。田舎の兵士中門の辺にやとりて此

事をきく。予青侍に謂て曰今夜の影をこそつか

ふまつりて候へと云々。侍の云興ある事也。

いかん兵士詠て云々、

水やそら空や水とも見えつかすかよひてすめ

る秋のよの月

待来て此よしを申ス。万人驚き歎て詠吟して、
且ツ感し且ツ恥て各退出すと云ハ。

このような俳諧注釈書は享保俳諧史の中でも特異な例ではなかったか。考証癖をもつ沾涼らしい著作である。今後は他の江戸座系の俳人にかかる注釈書を編んだ者があるかを調査し、もしあるならばその編集姿勢などの比較を行いたいと思う。

なお、「米山」(見返しには「米山翁」とあり)という俳号は本書より見える。

○同じく正月、奇談説話集『諸国里人談』を刊行。江戸池田屋源助・江戸須原屋平左衛門板、半紙本五卷五冊、自序、無跋。

本書は全国各地の名所・旧跡・名物の由来、その地方に伝わる奇譚などを考証的に記したもので俳書ではないが、信濃国の姨捨山を訪れた際の発句を一句収めているので挙げておくこととする。

姨捨は昼でも夜るのこ、ろかな
沾涼(40)

(卷之二「奇石部」)

延享元年(一七四四) 甲子 六十五歳

○秋、伊豆国熱海に遊ぶ(『熱海志』(41))。

温泉場で著名な熱海を訪れた際、沾涼は当地の詳細な地誌を編んでいる。これが自筆稿本として現存する『熱海志』(半紙本一卷一冊)である。これに、
発句が一句見える。

船の音わたくしの雨湯の煙

米山

延享三年(一七四六) 丙寅 六十七歳

○一月、果然編『俳諧時津風』(半紙本覆載二卷二冊、江戸池田屋源助板、谷村権六刻、時々庵(渭北)序、無跋)に発句一句入集。

露月の『名物鹿子』(享保十八年刊)に倣った絵俳書で、江戸の名所・名物を題とする絵とその画賛句を集めたもの。事物だけにとどまらず志道軒などの人物も題として取り上げる点も『名物鹿子』に同じ。

時々庵による序文に「(前略)時津風とうたふは門人果然なるへし(以下略)(42)」とあるので、編者果然は渭北門人で、他に反故斎・甲香庵などの号があ

る（『俳諧人物便覧』）。

沾涼の句は画賛句ではなく、載巻末の諸国の俳人の発句を集めた一群の中に見える。「木母寺の辺にあそひて」の項に、

蒟蒻の氷はとけて春の芝

沾涼

（載巻）

とある。

入集者は他に常国・湖十・米仲・紀逸・乾什・乙由・祇徳・沾山・貞山・存義・魚貫など。

板元の池田屋源助は、沾涼居のごく近所に店を構えており（神田鍛冶町二丁目）、また沾涼が『諸国里人談』・『本朝俗諺志』（次項参照）の二書を同書肆より上木していることから、沾涼と近い関係にあったのではないかと思われる書物問屋。寛保から延享の極めて短期間のみ、その名を見る書肆である。

延享四年（一七四七） 丁卯 六十八歳

○正月、奇談説話集『本朝俗諺志』を刊行。江戸池田屋源

助・江戸須原屋平左衛門板、半紙本五卷五冊、自序、池田屋二酉堂（板元に同じ）跋。

『諸国里人談』の後編であり、その内容・体裁も正編を踏襲したものであるが、これにも発句が収められているので以下に挙げておく。

卷三「善光寺龍燈」の項に、

朝風の身にしみく」と法の庭

米山

明記されていないが、おそらく自身が訪れた際のものであろう。また、巻四の「熱海温泉」の項（前出の「熱海志」に重複するところあり）には、

方斉湯わかせて見せよほと、ぎす

沾涼

の句が見える。

○十月二十四日、江戸にて没す（『筠庭雜録』）。浅草誓願寺にて法会を行い、伊賀上野にて埋葬か。辞世、「葉は茎はよし枯るとも薄の根」。法名は「民竈院南仙沾涼子」（『筠庭雜録』）。

沾涼の墓所の所在は長く誤伝されてきたと言うことが出来る。すなわち旧来、沾涼は浅草誓願寺の塔頭林宗院に葬られ、そこに墓碑が現存するかのようには説かれてきた。しかし、小池章太郎氏は地道な実

地調査の積み重ねの結果、林宗院に沾涼の墓は現存せず、少なくとも一九四〇年以前に消失していたことを指摘し、諸研究者に対しての警鐘とされた。

この事を踏まえた上で山本茂貴氏は「菊岡沾涼伝記の再考」において、沾涼の故郷である伊賀の現上野市愛宕町にある法林寺（現法輪寺）に、沾涼の墓碑の存することを紹介し、沾涼は江戸にて没し誓願寺で法会を行った後、飯東家の意向で遺骸を上野に移して葬ったのではないかと述べられた。

沾涼には二人の男子があり、やはり俳諧に親しんだ。長男は晴行舎・布仙などと号し、次子は梅五と号したが、この二人の句作はわずかに父沾涼の著作に見るのみであり、布仙が香道に親しんだらしき事以外詳しいことはわからない。「沾涼」の表徳は二人の息子のいずれでもなく、知友の俳人北村東巴が継ぎ、その没後（天明三年二月二日卒）、初世沾涼の実孫にあたる布仙の男光行（金工として著名）が三世沾涼を名乗った。

北村東巴が沾涼と親しくしていた事は、沾涼の『綾錦』・『鳥山彦』などに多く顔を見せることから

も察せられるが、「沾涼」を継いだ事情に関しては、『俳諧人物便覧』に「所縁有テ菊岡沾涼ノ名ヲ継ク」とあるのを知るのみである。ただし、島田筑波氏は言うところの「所縁」とは同じく元業をもって生業としていたことであろうと推察されている。

宝暦七年（一七五七） 丁丑 没後十年

○十月刊行の秀谷編『俳諧清水記』（近江屋藤兵衛・亀屋太兵衛板、半紙本一冊、六味序）に発句一句入集。

超波・買明門の秀谷（後の秀国）が、日暮里桜の宮参詣の帰りに立ち寄った水木久兵衛宅に「野中の井」を発見し、これに困んで「清水」を詠んだ故人の発句などを集めたもの。沾涼の句は元々『綾錦』下巻の「三十六番句合」に見える発句。

橋裏の灯はしらけたりほと、きす

吉沾涼

寛政七年（一七九五） 乙卯 没後四八年

○十月、蝶夢編『俳諧名所小鏡』中巻下（京都橋屋治兵

衛・井筒屋庄兵衛板、自序、瓦全跋)に発句一句入集。

全国の名所旧跡を詠んだ古今の発句を集めたもの。

本書の「諏訪湖」の項に、『綾錦』下巻の「三十六番句合」に見える沾涼の発句が収められる。

しなのなる歳暮車や湖の上

沾涼

三、考察 —— 俳壇での孤立の実態 ——

沾洲との論争

ここまで年譜形式で沾涼の俳諧活動における事績を追ってきたが、そこから見えてくるのは、やはり俳壇での孤立である。これは勿論通説を出るものではないが、こうして時系列に沿って概観すると、その晩年には同じ露沾門であった沾徳などの江戸座主流とは完全に袂を分かったかの如く、交流が途絶えている事が明らかとなる。

そのような俳諧活動の中で、唯一古くから注目されてきたのが、沾洲との論争で、これに関しては諸研究者が比較的多

く言及している。ここでは、この沾洲との論争を今一度整理・検証し、沾涼の置かれていた立場を明確にしたいと思う。まずはこの論争の概略を以下に示しておく。

発端は沾涼が自著『綾錦』(享保十七年刊)において、当時の江戸座点取俳諧の宗主たる沾洲の句を一つしか収めないなど、沾洲一派に対する明らかな過小評価をしたこと(詳細は前章年譜参照)。また、他の江戸座系俳書には見る事の無い自門の俳人の句を多く載せ、系図においても自らを沾洲の師である沾徳と同列に置くといった、主流派の目には俳系の誇示と映るような作為の跡を残した事である。

これに対して沾洲は『親うぐひす』(享保二十年刊)の中で『綾錦』を「胡論の書」と非難し、沾涼を「小人」と誹謗するに至った(年譜参照)。

沾涼は翌年『鳥山彦』(享保二十一年刊)によってすぐさま反撃に出る。「親薦序文返破」と銘打った乙巻に「譬喩俳諧滅却の論」を立て、点取俳諧の行き過ぎに対する反省をうちだした『五色墨』を、「一体やすらかにして蕉門流に沾徳風を少加へたるおもしろき俳風」と評価し、『五色墨』はひゆはいかいを亡さんと編る集にはあらず。たゞ尋常の歌仙也」という解釈は示しながらも、「畢竟ひゆの譬とすべきは

『五色墨』也」と、あたかも『五色墨』を沾洲と彼の譬喩俳諧に對峙する勢力であるかの如く位置付けたのである。更に、『譬喩俳諧に好める瘡毒下疳の俳病さらりと本復して蕉門流の健やかなる俳風とはなれり』と、『五色墨』の登場によつて譬喩俳諧が駆逐されたとし、であるならば『親うぐひす』の攻撃対象は本来『五色墨』であるべきで、『綾錦』を論難したのは筋違い、これは沾洲一派の俳風に五色墨派に對抗し得ない決定的な欠陥があるためだ、と主張した。

この論争には諸研究者も注目し、それぞれの解釈を示してきたことは先に述べた。次にその先行研究をまとめておこうと思う。

まず、口火を切ったのが頼原退蔵氏である。頼原氏は、『沾洲・沾涼共に露沾の系を承け、しかも現在沾洲の勢力は遙かに沾涼を凌いでゐるにも拘はらず、『綾錦』には特に沾涼門と肩書してあげた句主が多かつたので、それが沾洲の自尊心を大に傷けたものであらう』と沾涼の『綾錦』の編集態度が論争の引き金となつたことを指摘され、また、『鳥山彦』の「論中には胡論とか許々多久等の文字を穿鑿し、徒らに枝葉に互る点もないではないが、概して条理整然よく肯綮に中るものが多かつた。沾洲のいやみたつぷりな口吻に比すれば、

自ら『綾錦』の編輯に責任を負ひ、男らしく戦つて居る態度はとにかく氣持ちがよい』と沾涼の側を高く評価されている。更にこの論争全体を、「当時譬喩俳諧の横行に對する一般的反感のあらはれとも言ふべく、畢竟それは沾洲一派の没落を告げる弔鐘とも聞かれるのであつた。即ちこの論戦の間に、享保末年に於ける俳壇の消長隆替は十分窺はれるのである」と総括され、沾涼の主張自体も充分に首肯に値するものと結論付けられている。

これに對して鈴木勝忠氏は、『鳥山彦』を「それが論難の書であり、とくに勢力的に劣る者の發言である点を考慮に入れないければならぬことは、いうまでもない」とし、「そのま、信頼して、そのひゆ俳諧批判が受け入れられ、五色墨の位置づけがなされるのは、正鵠をえたものではない」と述べられた。更に「いわば、沾涼の沾洲批判は暴露的な悪意の下になされ、五色墨の称讃は、自己弁護のための問題点の摺り替えと解すべきである」と、沾涼の『五色墨』の理解や沾洲批判は曲解に基づく感が否めぬことを指摘された。

また、平井亮一氏も、沾涼は「親うぐひす」の比較的穏やかな句風を見て奇矯な譬喩俳諧も終つたと考えた²⁰のであり、「あなたがち実現に至らぬ期待を既成の事実として述べた

のではない」とはしながらも、やはり沾涼の言は「沾洲に對する私憤から出た言と思われるような客観性に欠けるところのあることは否めない」とされている。

加えて、平井氏によれば「鳥山彦」における沾洲批判は「(一)無理な言葉遣いの容認。(二)卑陋なものを素材とした譬喩として用いた句に高点を与えること。(三)付合の無視。(四)季の詞に関する無智とすべての方式の軽視。などであるが、それに対して、自己の志向する俳風や俳壇の弊風をどう改革していくかを具体的積極的に語るところがない」のであり、「蕉風をどう理解していたかも極めて漠然としている。沾洲歿後の江戸俳壇の消長と『五色墨』のもつ意義は『鳥山彦』の言う通りになったが、それは後世の観察で、『五色墨』の人々が芭蕉復帰の「高邁な」理想を持ち、沾涼が俳諧史の流れについて深い洞察をしていたとは考えられない」というように、沾涼の主張に欠陥のあることを改めて指摘された。

*

「綾錦」が俳壇の状況や自らの位置を正確に伝えていないことや、鈴木・平井両氏の指摘されるように、「鳥山彦」における沾涼の沾洲・譬喩俳諧批判が多分に主観的であることとは否定できることはないが、享保という時期に俳諧史・俳

壇・俳系を俯瞰し総括せんとしたその姿勢は評価されるべきである(その動機にはいささか不純な点があるにしても)。そこには沾涼のもう一つの顔である、故事考証学者としての姿が見え隠れしているのである。

蕉風への志向

鈴木勝忠氏が述べられているように、沾涼は当時の江戸俳壇において問題にもなっていないなかった(享保後期に俳風の復古運動が起きたのは周知であるが、それとても普通其角、または貞門・談林を対象とした)芭蕉に視点を向けていた。江戸座の中で孤立するに至った原因の一つは、その再三再四にわたる親蕉門的な発言であり、換言すれば、それは沾涼の俳壇での位置を考える上での一つの手がかりである。ここでは沾涼の親蕉門的な言説や行動に着目し、その傍証としたい。

○芭蕉書の句短冊を所持。

何の木の花とは知らず句ひ哉

此たんざく沾涼所持中川文露へ送る今露牛の手

芭蕉

にあり

〔綾錦〕上巻)

○俳諧系譜の芭蕉の項に自らの養祖父との関係を記述。

本土伊賀上野ノ士松尾藤七郎菊岡随性軒如幻導

而吟門

〔綾錦〕上巻)

○伊賀蕉門の重鎮服部土芳と実父三悦の交流を述ぶ。

此正一位乃尊像は頼阿法師の作、宗祇法師尊敬の靈像にして、宗牧につたはる。伊賀国上野飯東氏喜三

生国尾州清洲織田家ノ士は、宗牧の門人たるによつてこれを後為院監居伊賀國

附屬し、息政安補左衛門番に譲る。而後服部土芳

字左衛門上云芭蕉高弟にあたへて年あり。

〔綾錦〕下巻)

○深川本所の芭蕉庵の荒廃を嘆く。

江府には第一翁の旧跡あるべかりけるに、其跡さへしる人まれ也。今宗匠俳士幾千の数もしられざる中に、誰あつてこれを興す人なし。江府俳人の風雅なきを他の国にて笑られんもいと口おし。近代相の鳴立沢は三千風中興し、羽のあこやの松は李山法師の起せしためしあれば、予これを多年勞すといへども、

其願いまだ熟せず、嗚呼時のいたらざるものか。

〔続江戸砂子〕巻之三)

○芭蕉・其角・嵐雪の警咳に接したことを述べる。

予は、ばせをも其角・嵐雪が顔も見たり。

〔鳥山彦〕乙巻)

○蕉門俳人八十村路通との交流。

路通の直談その詞をその儘にあらはし侍る。

〔宗語狐〕、「諸国里人談」巻五「氣形部」

江戸では宝永頃より其角が点者として軽妙・洒脱な洒落風を興し、やがてその風は江戸の浮世風と呼ばれ、新風として江戸俳壇を席卷した。このように枯淡・閑寂を旨とする芭蕉の高弟でありながら、絢爛・寛闊な俳風を好んだ其角を範として出発した享保江戸俳壇にあつては、田舎蕉門の如く芭蕉を祖述しつづけた沾涼のような俳人が、異端視され孤立するのは時代の必然であつたと言えよう。

生粹の江戸人ではなく、地方からそれも芭蕉と同じ伊賀上野から出府した沾涼が、自ずから蕉門に理解を示すのは当然の成り行きであるし、自身には偉大な先人と同郷であるという自負もあつたろう。しかし、深遠幽玄な芭蕉の風は過ぎ去

り、時代の趨勢は完全に人事句に重きを置いた都会的取俳諧にあった。そのような時代を背景として、ここに示したような芭蕉信奉者とも言える沾涼の行動・言説が江戸座主流派の俳人たちに疎んぜられる結果となったのではなからうか。

主要俳書からの除外

年譜からも明らかであるが、沾涼は他の俳人の撰集への入集数が極端に少ない。これを具体的に見てみることにする。

- ① 沾徳編『余花千句』 (宝永二年刊)
- ② 風葉編『江戸筏』 (享保元年刊)
- ③ 沾徳編『後余花千二百句』 (享保六年刊)
- ④ 沾洲編『百千万』 (享保十年刊)
- ⑤ 風葉ほか編『統江戸筏』 (享保十五年刊)

右は江戸座の主流として君臨し続けた沾徳・沾洲一派の主要な俳書で、沾徳系は言うに及ばず、其角・嵐雪系の門人まで多くの俳人が連衆として名を連ねている。これは沾徳・沾洲が当時の俳壇で権勢を欲しいままにしていたことを如実に

示しているが、沾徳の弟子にあたる沾涼及びその門人の名はこれらのいずれの書にも見ることができない。

具体的に見てみると、沾徳の一番弟子たる沾洲は、早く①において連衆として歌仙に四十一句入集しており、また②には既に沾洲門の門弟である甘谷が参加している。これは沾徳系の撰集であるから、当然のことと言えば当然なのだが、②には嵐雪系の末流である拾翠なる者まで入集しているのである。沾徳と同じく露沾門である沾涼がまったく入集していないのは不自然なことと言わざるを得ない。

更に③になると、其角門の高弟である湖十や冠里なども取り込み、沾徳・沾洲一派の勢力はますます強大なものとなってゆき、④という沾徳座・其角座・嵐雪系などを網羅した、江戸座の著名な作者のほとんどが入集する大作の完成を見る。そして、その流れは⑤へと継承されてゆくわけであるが、ここに至っても沾涼一派が顔を見せる気配はまったくない。特に、④において完全に無視されているというのは決定的な出来事と言うことができる。すなわち、沾徳・其角・嵐雪の各系統の俳人をほぼ余すところなく網羅し、剩れ地方の出身で後に出府し宗匠として立つという、沾涼と極めてよく似た経歴をもつ貞山(前章享保十一年の項参照)の如き俳諧師も

名を連ねているのである。これは明らかに、編者沾洲の意図的な行動だと言えるだろう。

ただしここで注意したいのは、沾涼は沾洲一派、つまり主流派の俳書においてのみ除外されているのではないという事実である。

譬喩俳諧のゆき過ぎに警鐘を鳴らし、その奇矯に過ぎた俳風に対する反省を打ち出した『五色墨』は、沾涼自身がその句風を「蕉門流に沾徳風を少加へたるおもしろき俳風なり」（『鳥山彦』）と言うように、芭蕉に目を向けたものであったが、沾涼はその『五色墨』、またその追随作たる水光ほか編『四時観』（享保十八年刊）においても参加していない。

また、これら一連の運動を契機として起こった復古運動の中で、其角の風への復帰を志して編まれた、貞佐編『梨園』（享保十六年成、同二十年刊）・超波編『落葉合』（同十六年序）などにもその名を見ることはできない。なお、前者には沾涼と同じく絵俳書作者として出発した露月の発句が一句入集している。

前述したように露月や貞山、そしてやはり地方出身の俳諧師常盤潭北などと比較すると、沾涼の入集数のいかに少ないかが浮き彫りとなるのであるが、次にその様を主流派以外の

俳書を例に見てみよう。

左に沾涼・露月・貞山・潭北の入集数を示す図を掲げた。各流派の様々なタイプの俳書をサンプルとしてあげている。

⑥ 露月編『秋の雛』（享保十一年）	0	0	0	2
⑦ 沾洲ほか編『白字録』（享保十一年）	0	1	1	1
⑧ 嵐山編『花の兄』（享保十二年）	0	1	0	0
⑨ 露月編『微雨の梅』（享保十三年）	0	0	0	1
⑩ 同編『亥歳旦』（享保十六年）	0	1	1	1
⑪ 桃丑編『臥龍梅』（享保十八年）	0	1	0	0
⑫ 水光ら編『去來令』（享保十八年）	0	0	0	0
	沾涼	露月	貞山	潭北

表を見れば一目瞭然であるが、沾涼はこれら七書のいずれにも入集していない。他の三者の入集頻度に比して異常と言つて過言ではなからう。特筆すべき点は⑦にも顔を見せない事である。これは沾徳の追善集で、沾洲一派はもとより後の五色墨連中や、刻師の吉田宇白・大久保一富、更には三升といった極めて広範囲にわたる諸俳人が追善の句を寄せているのである。本書は上巻が現存せず、軽々に判断すべきではないが、上巻も下巻と同様の顔ぶれであるなら、沾徳と同門で

ある沾涼の句が見出せないというのは甚だ不可解なことである。

また、⑥・⑨・⑩はそれぞれ露月の月次集・絵俳書・歳旦であるが、これには貞山・潭北が軒並入集しているものの、沾涼は調査した限り皆無である。

⑧は露沾一門の歳旦であり、連衆として露月や沾洲・貞佐・立圃などが見えるが、なぜか露沾門正統であるはずの沾涼は見えない。

⑪は葛飾郡亀戸村の臥龍梅に因んだ奉納句集。沾洲・沾山・水国・成屋などの沾洲一派と五色墨連中が揃い、大尾には露沾句も備わるなど、沾涼が参加していても決して不思議では無い顔ぶれだが、ここにも露月しかみとめられない（臥龍梅は名木として聞こえた有名な梅で、沾涼もその著書『江戸砂子』や『諸国里人談』にその名の由来を考証しており、実際に訪れた際の句などを載せている）。

祇空の追善集たる⑫でも、貞山は入集するものの沾涼は確認できない。

これらのことから、同門他門にかかわらず、江戸座俳人の歳旦・撰集・追善集・句会興行のいずれにも積極的に関ることのなかった沾涼の姿が浮かび上がるのである。

四、結語

以上見てきたように、菊岡沾涼は江戸座の中では完全に孤立した存在であった。

其角の洒落風を継承し、その奇矯な俳風がさらにエスカレートした譬喩俳諧の嵐が吹き荒れた享保江戸俳壇にあって、常に蕉風俳諧への敬慕の念を持ちつづけた沾涼はまさに異端であった。

さらにまた、沾洲が没してその譬喩俳諧が衰え、古文辞学派の影響で俳諧の世界にも古学が流行した時、平明・温雅な句風への回帰を目指して貞佐や青巖たち、その動きに積極的であった江戸座俳人が範に求めたのは、あくまで其角や談林の風であって蕉風ではなく、ここからも沾涼は除外されてしまったのである。

すなわち、沾涼は、沾洲の譬喩俳諧とはもとより相容れなかったが、その後の『五色墨』連中の活動や、江戸座全体の復古運動においても活躍する場が無かったと言うことができ。換言すればそれは、江戸における都会派（其角系統、江戸座主流）と地方系の俳壇（『五色墨』連中、田舎蕉門）の

どちらからも一定の距離を保っていた（本人の意図した所ではなかつたらうが）ということである。

沾涼の孤立は彼の俳書に序・跋を送った俳諧師の変遷からも読み取ることができる。すなわち、執筆活動の最初期は沾徳・沾洲との関係も良好だったらしく、彼らから送られた序文・跋文を目にするが、やがて自序・自跋の数が増え、寄せる俳諧師も江戸座の主流派ではなく、蕉門俳人である卜宅（『綾錦』跋文）や嵐雪系の吏登（『藻塩袋』跋文）のような人ばかりになっていくのである。

また、そもそも沾涼の言う蕉風とはいかなるものであったのか。これが難題である。彼が直接このことに言及していないからである。彼は「連は幽玄俳は寛闊^{やさしく}」であると考えた（『綾錦』序文、もと漢文）。しかし、「だて」とは本来、芭蕉の閑寂に対して其角の風を言うのであり、俳諧の本質を「寛闊^だ」とするのは芭蕉信奉者の言としては矛盾するようにも感じる。それとも「だて」の解釈に独自のものがあるのだろうか。

いずれにせよ、俳諧研究の門外漢である筆者には今回沾涼の俳論・句風の解釈を行う用意が無い。今後の課題である。

菊岡沾涼という人は言うまでもなく、俳諧活動よりも地

誌・説話作家として輝きを放った人物であるが、今回改めて確認した俳壇での疎外とも言える扱いが、その旺盛な執筆活動にも少なからず影響（発憤者書説ではないが）しているのではあるまいか。俳諧師としての活動を検証することで、江戸中期を代表する雑学家としての姿も自ずから鮮明になってゆくのであろう。筆者の興味のおもむく所も実はその方向にあり、本稿はそのための基盤ないし前提となるべきを期したつもりである。

現段階では江戸座系の俳書をすべて調査できたわけではない故に疎漏も多々あるかと思う。この点については後日補訂するつもりでいるが、諸氏より御教示頂ければ幸甚である。

〔付記〕

本稿は、二〇〇二年十二月に行われた成城国文学会冬季大会での口頭発表をもとに再構成したものである。^{*}

俳諧活動的を絞った本論の性格上、今回はあまり触れることができなかったが、沾涼の生地伊賀上野に関する資料や情報については、諸氏からの学恩によるところが大きい。

三重県上野市に現存する沾涼の墓地に関する情報や、当地の資

料の所在などについて芭蕉翁記念館、馬岡裕子氏に多大なるご鴻恩を賜った。

また、同氏にご紹介いただいた上野市古文献刊行会委員の角舎利氏には、上野市立図書館所蔵の沾涼関係資料について、遊ロード三重ふるさとの語り部の寺村壽夫氏には、菊岡如幻について縷々ご教示いただいた。

さらに、沾涼のご後裔にあたる飯沢家には墓碑の拓本をとることを快く許可していただいた。

以上の各氏に対してそれぞれのご芳名をここに記し、心より深謝するものである。

〔注〕

(1) 『江戸砂子』が江戸地誌の代表的大著である斎藤月岑等編『江戸名所図会』(天保五年刊)を始め、その後の多くの地誌に大きな影響を与えている事は言うまでもないが、それ以外にも『本朝世事談綺』が喜多村信節編『嬉遊笑覧』(天保元年成)や喜多川守貞編『守貞謄稿』(嘉永六年成)に、『諸国里人談』が都賀庭鐘著『英草紙』(寛延二年刊)や鳥居清経作『野金紙屑』(安永四年刊)に素材を提供している事が知られる。

○尾形仿『中国白話小説と『英草紙』』(『文学』三十四卷三号、岩波書店、一九六六年三月十日)

○飯倉洋一『奇談から読本へ』(『日本の近世』十二卷、中央公論社、一九九三年五月所収)

○中山右尚『野金紙屑』上冊の素材二点(『江戸時代文学誌』第三号、柳門舎、一九八三年六月三十日)

(2) 沾涼の生没年に関しては、長く誤謬がまかり通り、諸辞典類においても混乱が見られた。すなわち、六十歳・六十二歳・六十余歳説のある如くである。

かかる状況の中で、かつて山本茂貴氏が、「飯東氏過去帳」・「菊岡氏文書」に没年が延享四年であり、その年齢は六十八歳との記述が見えることを指摘されている(『菊岡沾涼伝記の再考』(『三重の古文化』四十七号、三重郷土会、一九八二年三月十日)。沾涼の生家・養家の生業や養子に出された理由などは、これによってのみ知ることができ、大変貴重な資料であるが、現在は所在不明となっている。

また、喜多村筠庭編『筠庭雜録』(天保三年以降成)中巻に「延宝八年生れて享年六十八、延享四年十月身まかりぬ。」とあることも周知である(但しこのくだりは日本随筆大成本にのみ見え、燕石十種本には見えない)。

しかし、沾涼自身がその著作、延享四年刊の説話集『本朝俗諺志』の巻末に「延享丙寅 米山翁六十有七書」と記しているのである。「延享丙寅」といえば延享三年(一七四六)、つまり没する前年であるから、やはり享年(延享四年)は六十八歳であったことがわかる。自身の言であるのだから、これこそ最も信用するに足る記事と言えるのではなからうか。

(3) 『新版日本随筆大成』第二期七巻(吉川弘文館、一九七四年三月)。以下同じ。

(4) 雲英末雄編『俳家大系圖』(書誌学月報3)(青裳堂書店、一九九七年十月)。以下同じ。

(5) 白石悌三『芳賀一品』(同著『江戸俳諧史論考』(九州大学出版会、二〇〇一年十月)所収)。

(6) 雲英末雄校注『俳家奇人談・統俳家奇人談』(岩波文庫)(岩波書店、一九八七年十月)による。以下同じ。

- (7) ^{加藤孝編}『関東俳諧叢書』第十七卷絵俳書編①(青裳堂書店一九九八年九月)による。
- (8) 愛知教育大学附属図書館蔵本(国文学研究資料館マイクロフィルム)による。
- (9) 天理大学附属天理図書館綿屋文庫蔵本による。
- (10) 天理大学附属天理図書館綿屋文庫蔵本による。
- (11) 国立国会図書館蔵本による。句読点は筆者。
- (12) 尾形佑ほか編『俳文学大辞典』(角川書店、一九九五年十月)。
- (13) 松宇文庫蔵本(国文学研究資料館マイクロフィルム)による。
- (14) 天理大学附属天理図書館綿屋文庫蔵本による。
- (15) ^{加藤孝編}『関東俳諧叢書』第十卷(青裳堂書店、一九九九年二月)による。
- (16) 勝峯晋風編『普及版俳書大系』31(春秋社、一九三〇年七月)による。以下引用同じ。
- (17) 松宇文庫蔵本(国文学研究資料館マイクロフィルム)による。
- (18) 東京大学図書館酒竹文庫蔵本による。
- (19) 天理大学附属天理図書館綿屋文庫蔵本による。
- (20) 島田筑波「江戸座俳書年表」(加藤定彦編『島田筑波集』上(青裳堂書店、一九八六年五月)所収)による。
- (21) 塩崎俊彦「万屋清兵衛の俳号について」(会報大阪俳文学研究会)第二十七号(大阪俳文学研究会、一九九三年十月十二日)。
- (22) 『名物鹿子』下巻には、
吉田守白
歳日は年の花なり江戸の群 祐親
(木村捨三解説『註解江戸名物鹿子』(近世風俗研究会、一九五九年)
という句が見える。なお、肖像が描かれているのも資料として貴重と言えよう。
- (23) 石井研堂著『錦絵の彫と摺』(芸芸堂、一九二九年)。筆者は改訂版(一九九四年一月)によった。
- (24) 後述する沾涼の自筆稿本「故郷の水」(享保十八年成)に、
一とせ和散才立志上京の砌、
乗り下りはたゞ山さくら山桜
と、むまのはなむけせし事をおもひあわせぬ。
とある(引用に関しては注(34)を参照のこと)。
- (25) ^{加藤孝編}『関東俳諧叢書』第十五卷(青裳堂書店、一九九六年五月)による。
- (26) 白石悌三「水間沾徳」(前掲『江戸俳諧史論考』所収)。
- (27) 天理大学図書館綿屋文庫編『俳書叢刊』第一期四(天理大学図書館、一九五〇年二月)による。
- (28) 日本古典文学会編『絵入俳書集』(貴重本刊行会、一九八六年二月)による。
- (29) 鈴木勝忠「享保後期の江戸俳壇」(愛知学芸大学研究報告「四輯、一九五四年十一月。現在は同著『近世俳諧史の基層』(名古屋大学出版会、一九九二年十二月)に所収)。
- (30) 小池章太郎編『江戸砂子』(東京堂出版、一九七六年八月)による。以下引用同じ。
- (31) 注(30)、小池氏解題を参照。
- (32) 愛媛県河野記念文化会館蔵本(国文学研究資料館マイクロフィルム)による。岩瀬文庫蔵本。
- (33) 同注(16)。もと漢文。
- (34) 山本茂貴「伊賀に伝存する菊岡沾涼自筆『故郷の水』の稿本について」(『伊賀郷土史研究』6(同朋舎、一九七四年十

- 一月二十五日)。引用もこれによる。
- 氏の発表当時、原本は服部土芳の叔父筋にあたる木津保之氏の秘蔵ということであったが、現在は散逸してしまっている。数少ない自筆資料であり、痛恨の極みである。何とか発見されることを願うのみであり、山本氏が全文翻刻されたのが、せめてもの救いと言えよう。氏の功多とすべきである。
- (35) 其編集委員会編『露沾俳諧集』上・下(天理図書館綿屋文庫俳書集成26・27)(八木書店、一九九八年六月・八月)による。
- (36) 鈴木勝忠「未刊江戸座俳論集と研究」(未刊国文資料刊行会・一九五九年一月)による。句読点は筆者。
- (37) 鈴木勝忠校注『享保俳諧集』(古典俳文学大系11)(集英社、一九七二年三月)による。以下引用も同じ。
- (38) 白石悌三「沾洲の生没年など」(雲英末雄編『元禄俳諧集』(種資料影印叢書国書篇第十卷)(早稲田大学出版部、一九八四年三月)月報。現在は「貴志沾洲」として、「江戸俳諧史論考」(注(5)参照)に収録。
- (39) 国立国会図書館蔵本による。句読点筆者。
- (40) 「新装版日本随筆大成」第二期二十四卷(吉川弘文館、一九九五年五月)による。
- (41) 杏雨書屋蔵本による。引用も同じ。
- (42) 木村捨三註解『註解俳諧時津風』(近世風俗研究会、一九六〇年十一月・十二月)による。以下引用同じ。
- (43) 三浦若海著『俳諧人物便覧』(弘化元年以降成)(加藤定彦編『俳諧人物便覧』(ゆまに書房、一九九九年六月)による)。
- (44) 山下琢巳「本朝俗諺志——翻刻と解題——」(東京成徳短期大学紀要)第二十四号(東京成徳短期大学、一九九一年三月二十四日)による。以下引用同じ。
- (45) 注(2) 山本氏論考参照。
- (46) 藤浪和子『東京掃苔録』(日本史籍協会、一九四〇年)に、「墓所は菊岡家代々としたる木標をたてしのみなり」とある。
- (47) 注(2) 山本氏論考参照。
- (48) かつて初世沾涼(房行)と三世沾涼(光行)を同一人物として混同する辞典類が後を絶たず、近年刊行されたものすらまま見受けるが、この点に関しては夙に島田筑波氏の「金工菊岡光行」(「芸苑」一卷三号(帝国美術社、一九一八年八月一日)。現在は「島田筑波集」上に収む)、近くは小池章太郎氏の論注(30)に尽くされておるので、ここで繰り返すことはしない。
- (49) 注(48) 参照。
- (50) 加藤定彦編『関東俳諧叢書』第十卷江戸編②(青雲堂書店、一九九七年五月)による。
- (51) 村松友次編『俳諧名所小鏡』下(古典文庫)(古典文庫、一九九〇年八月)による。
- (52) 頼原退蔵『続俳諧論戰史』(「俳諧史論考」(星野書店、一九三六年六月)所収。現在は「頼原退蔵著作集」第四卷(中央公論社、一九八〇年三月)に収む。引用はこれによる。以下引用同じ。
- (53) 注(36)「解説」による。引用以下同じ。なお、この論争については、同氏「享保後期の江戸俳壇」注(29)参照にも詳しい。
- 「五色墨」連中がその刊行後、必ずしも沾洲一派との交流を断っているわけではないこと、すなわち「五色墨」が沾洲批判を目的としていないことを、長水らの沾洲・其角系俳書への入集数から立証され、また、沾洲の「鏡錦」批判はその系譜

が攻撃対象であったにもかかわらず、「鳥山彦」において、
 沾涼は沾洲の俳風を批判したと、沾涼による問題点の摺り替
 えに関してもより具体的に言及されている。

(54) 平井亮一「綾錦」と「鳥山彦」(「神戸海星女子学院大学
 研究紀要」20、神戸海星女子学院大学、一九八一年十二月十
 五日)。以下引用同じ。

(55) 注(36)「解説」参照。

(56) ⑥・⑩は雲英末雄編「享保宝曆俳諧集」(大編資料影印叢書
 国書篇第四十一卷)(早稲田大学出版部、一九九五年九月)
 に、⑦は京都大学頼原文庫蔵本に、⑧は愛知教育大学附属図
 書館蔵本に、⑨は関西大学図書館編「近世俳書集」(関西大
 学出版部、一九九四年七月)に、⑪は中村俊定編「近世俳諧
 資料集成」2(講談社、一九七六年六月)に、⑫は「関東俳
 諧叢書」第五卷四時観編①(青裳堂書店一九九四年七月)に
 よる。

(ましま・のぞむ 成城大学大学院博士課程前期)